

# 佛教音楽「真実との出会い」：ひびき合える世界を求めて

著者	渡邊 顯信
雑誌名	真実心
号	23
ページ	37-73
発行年	2002-03-10
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000613/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000613/</a>

## 佛教音楽「真実との出会い」

— ひびき合える世界を求めて —

渡 邊 顯 信

### I はじめに—問題の所在—

— 生命いのちの実感 — 最近の世相から —

去年まで、二〇世紀最後の年だ、次年から新しい世紀だという言葉が飛び交い、社会全体がそういう方向に向かっていました。考えてみますと、いつの時代も時間の流れは同じです。去年も一昨年も百年前も、二千年前であっても、イエス・キリストが生まれられた時であっても、釈尊が生まれられた時であったとしても、時の流れは大

きな変化はありません。ただその時代を取り巻く社会状況がどんどん変わってきた、これだけは事実です。変動の激しい社会状況に、ただ我々が翻弄されているだけではないだろうかと感じます。

そのような印象から副題として「最近の世相から」と書きました。数日前の報道で京都女子大学の学生がメル友と称するコミュニケーションの犠牲者になりました。

メールそれ自体が悪いのではなく、そういう犠牲者がうまれやすい科学技術の抱えている陰の問題を、我々はつい忘れて、表面的な利便性にのみに振り回されているのではないかと思うのです。

四・五〇年前には、公衆電話のダイヤルを回すことさえ、躊躇されたお年寄りが居られました。歴史をたどれば、受話器から声が聞こえてくることが不思議な時代もありました。グラハム・ベルが電話器を考案した時、人々は魔法にかかったような思いを持ったそうです。ところが今では、携帯電話の普及によってますます即時的にコミュニケーションが可能になってきています。しかし、この便利さが自分自身を不明なものにしているのではないのでしょうか。本当はあらゆるものを明らかにしていくのが

# 佛教音楽「真実との出遇い」

人間の歩みであり、進歩であるはずなのですが、如何でしょうか。「私は携帯電話やパソコンに左右されないわ」と思う方もおられるかもしれない。けれど、現代という時代は、かなりの情報が自分に無関係に飛び込んできますね。

本来は、良い情報を一刻も早く満遍なく共有させるための技術革新であつたはずですが、残念なことに情報が悪用されたりもしています。そのために便利なはずの情報そのものが、今度は厳選されなければならないことにもなっています。溢れる情報の中で、誤った情報や改竄された情報に翻弄されているのにも気がつかず、本当だと思ひ込んでしまう自分の弱さ、そういうことが今、世の中の大きな問題として広がってきていると思います。

それでは、どうしたら良いのか、どうすることが大事なのかということが問題になってきます。これが今日こちらへ伺った主題でもあります。五条通り正門の塀に「一人ひとりが輝く未来のために」というポスターが張りだされていました。そのポスターの願い、光華女子学園の願いに同感して皆さんは入学され、これから何年間か勉学の道を歩んでいかれるはずです。そういう意味も含めまして、ぜひ「生命<sup>いのち</sup>」という

問題を含めて考えてみていただきたいと思います。

世界保健機構（WHO）が「二一世紀は心の世紀」と言っています。私どもとしては当然の指摘だと思います。二〇世紀までの世界全体の流れは、科学技術オンリー、それを優先させて来た時代ですね。当然のこととして、精神的な問題、心の問題は後手後手にされていました。しかし、WHOでは今後、精神保健が人類の幸福、生活の向上にとって大きな条件になると見直し始めました。医療機関の変化もありますが、今までの医療姿勢は、大体急性患者に対する対処や処置方法が中心だったようですが、今は慢性疾患の障害を除去する方向が見直されだしているそうです。この変化は、人間の幸福は物理・科学技術だけの問題ではなく、実は、スピリチュアルなものが根底になければならないということに気がついたことに大きな成果があるようです。

たとえば、具体的に人間の一生を世代別に分けてみますと、誕生に始まり、幼児期、青年期、壮年期、老年期、そして最後には死にいたりします。四月の学長先生の講話の中に「四苦」のお話があったと思います。四つの苦しみ、即ち生まれるという苦しみ、年をとり体力的にも老いてゆく苦しみ、病気の苦しみ、死に対する苦しみの四つに代

佛教音楽「真実との出遇い」

表される苦しみが、佛教の開祖でありますゴータマ・シッダールタにとっても人生上の大きな問題だったわけです。人生におけるこの「四苦」は、千年前も二千年前も今も全く同じ一緒です。平均寿命が五〇年であるか六〇年であるか、現在のように八〇年であるか、その違いはありますが、一人ひとりにとっての生・老・病・死はいつの時代でも常にかかわってくる問題です。

幼児期や育児期の中で、最近、特に実の両親が自分の子どもを虐待して死に至らしめるというケースが時々報道されますね。自閉症とか発達障害という問題もあります。が、幼児虐待が多くなってきました。自己責任を果たせないまま親になった場合が多いようです。学業期では、受験勉強中心の学習の弊害などにより、悩んだあげくの不登校や家庭内暴力などによる意志表示の例が少なくありません。これらの事例は人ごとではなく私たち自身の問題でもあります。自分自身を振り返ってみても、そういう精神的不安定な気持ちにおそわれたこともあります。思春期になりますと、心身の発達過程に伴う精神的動揺、皆さんも経験されたことでしょう。往々にして、人間は不安定感におそわれた時、ある程度の精神分裂症とか神経症にかかりやすいよう

です。そのような時、思わぬ行動をとってしまうようです。安易に薬物に依存してみたり、自暴自棄に陥ったり、昨年の一七歳の少年の事件のように「人を殺してみたかった」という瞬間の妄想のままに、殺人事件を起こしてしまった。掛け替えのない大切な生命が、そういう短絡的な行動のために失われてしまった。残念ながらこのような予想だにせぬ生命軽視の事件の多くなっていることを、社会全体で重視しなければならぬと思います。

壮年期になりますと、躁鬱症ということがあります。調子がよくなったり落ち込んだり、それをクリアし乗り越えるために、麻薬やアルコール等に依存し、気がついた時には中毒症状になってしまう場合も多いようです。老年期になりますと、老化の問題がありますが、時には、痴呆状態が進行する。痴呆化は人ごとではなく、多くの人が将来そうなる可能性を内在しているというリスクを持つていることに気がつけば、それに対する準備、健康的な面も精神的な面も含め、準備ができるはずです。そういう意味では、ただ漫然と二〇代、三〇代を過ごしてしまうのではなく、今まで二〇世紀までに身につけてきた近代科学の技術的恩恵を生かしながら、そこから出てくる裏

佛教音楽「真実との出遇い」

面、表に出てこないマイナスの部分を二一世紀にはどうしていったらいいか。このことも一つの大きな皆さんの課題になるかと思っています。

次に、世界銀行の調査発表によりますと、今後の経済効果の予測から人間の健康問題が重要な視点になってくるようです。「人間の活動を障害するという要素」からの調査データ報告に、病気のベストテンが発表されています。その中の上位五位までに精神障害を含めていま申しあげたような病気がリストアップされています。

ところで、皆さんは、日本の現在の食生活は、ほとんどが輸入品に頼っているというのを聞かれたことがありでしょう。私どもが若い頃、日本は農業国、漁業国と言われていました。ところが今は経済性、利便性を中心にした科学技術を表面に打ち出した技術中心の工業立国になっています。すべて経済的發展の名のもとに、古来の伝統文化も軽視して来ました。その結果、農産物の輸入国になっています。輸入先の国、それを生産する国にいろんな問題を発生させているようですが、そこまでは責任を負わず、ただ自分たちが腹一杯食べられればいいんだ、きれいな美味しいものを食べられればいいんだと。ファミリーレストランで出てくるものの殆どが加工された輸入



食品なのだそうです。それを食べ散らしたり、平気で食べ残している。同じ時代に食糧不足で餓死したり、栄養失調になっている人々が多数いるのですが。二一世紀には、限られた資源問題のためにも、食文化を再考しなければいけない。

次の問題を考えてみましょう。五月四日のニュースで、三人の遺伝子を持つ赤ちゃんが生まれたという報道がありました。すでにこのような赤ちゃんが三〇人ほど生まれているそうです。これがどういう問題であるか、今後大きな話題になってくると思えます。遺伝子の操作に関してつい数年前、一九九七年の新聞で「二〇世紀は語る」というタイトルの中で「遺伝子解読計画は人類に何をもたらすか。生命創造の地図を今、人類は手にした」とあります。三人の遺伝子を持つ赤ちゃんが生まれる現実は今未来のことでした。ヒトゲノムと称する遺伝子の解読作業が四年後に完了するとは想像がなかったことでした。

もう一つ生命いのちを考える事例を考えてみましょう。それは過去の誤った行政判断を覆す大きな出来事でした。レジュメの「もういいかい、骨になってもまあだよ」、これは、あるハンセン病患者の方の川柳です。九〇年ほどの時代の流れの中で、ハンセ

# 佛教音楽「真実との出遇い」

ン病は国家的にも医学的にも強制隔離という特別な状態に置かれてきました。一九〇七年「癩予防二関スル件」という法律が制定されたのは、「ハンセン病患者が町の中を徘徊し放浪していることが目立つので隔離する」ためでした。一九三一年には「癩予防法」が、そして戦後になった一九五三年でさえ、同予防法の「新法」が新たに継承されました。それが大きな問題であったということが、漸く社会的共通認識として常識化され始め、最近、九州の裁判所でそれに対する判決があり、国の責任が追及されていますね。最終的に国がどう扱うかが大きな問題になっています。

最後に科学技術に関する問題でもある産業スパイのことが、具体的に学問研究の分野にまで広がってきました。遺伝子情報研究資料を持ち出したということで、日本の若手二人の研究者が、アメリカの大陪審院から起訴されています。この若手研究者の研究対象は、アルツハイマーの研究でした。人類のためには待望の研究なんですが、経済効果からみますと、ベンチャー企業にとっては格好の商売材料なんです。儲かる材料なのです。経済性絶対優先志向の中に、研究者たちが取り込まれてしまった事例でしょう。打算的な大きな危険性、それが現実には具体化したのがこの問題だと思

ます。古来より技術革新は、経済的魅力・効果が最優先されるため、客観的研究領域とはいえ、人間を変質させる事例が多くあるようです。

科学技術優先志向の陰の部分が明確に現れている事例として、次の問題も検討し直す必要があると思います。

一九九〇年代、ソヴィエット連邦が崩壊してロシアになり、続いて東欧共産圏も崩壊しましたね。それまでは二大大国、アメリカ、ソヴィエット、それに代表される民主主義、共産主義・社会主義という大きな二つの力がある程度拮抗していましたが、それが崩れました。それにも拘わらず、一番気になりますのは、核爆弾の保有数のことです。冷戦時代の緊張関係の中、自国防衛維持という名目の下で互いに「核兵器による抑止力」を競い合っていました、その緊張関係が不要になった現在も減少されていません。むしろ米ソ以外の国も競って核実験を発表するような現状は、まことに残念な事態ではないでしょうか。

アメリカは、核兵器縮小傾向を凍結させて、弾道ミサイル実験の継続や、新たな独自の「ミサイル防衛網開発」を発表しました。緊張関係の解消した現在にも拘わらず、

## 佛教音楽「真実との出遇い」

なぜ核兵器を必要とするのか。仮想敵国への恐怖感なのでしょいか。自国の国益が最重要課題であり、そのための主導権を維持するための武力誇示なのでしょいか。自国の国益のためには、相手国の国益を無視する姿勢なのでしょいか。この姿勢は環境問題の京都議定書批准拒否にも現れているのではないでしょいか。アメリカは自国経済を優先させるために批准しないそうです。

政治・経済など各分野で主導権を握っている大国でも、自己本位に翻弄され、常に安心できないという弱さがあるのでしょいか。科学技術発展が到達する当然の危険性なのでしょいか。このような危険性がなければ、世界平和の実現はあり得ないのでしょいか。

### 二 宗教の本質

ここで「宗教の果たす役割」が問われて参ります。先ず「宗教」の語を語義的にみれば、本来は佛教の要点を説く教法のことで、真理を覚られた方の思索内容を学び追体験すること、それが佛教のそして宗教の本質です。

一方、明治時代に「Religion」を翻訳する時、十分な検討を重ねずに「宗教」の言葉を使ってしまった。このように翻訳上の問題が何点かありますが、Religionの語義解釈には次のように代表的な二説があります。

一つは接頭辞「re-（再び）」と語根「√leg（拾う）」の合成語「relegere」が転じた言葉「religio」で、もう一つは語根「√lig（結ぶ）」とらう合成語「religare」が転じた「religio」から出た言葉だと。どちらも religio というラテン語です。

紀元前の哲学者キケロ Cicerone は前者の意味に使い、紀元後の神学者ラクタンチウス Lactantius は「再び結ぶ」という解釈を使いました。神の国から追放されたアダムとイヴに代表される人類を、再び神と結ぶという関係、それが Religion である。また慣例的語義から分類すれば、キリスト教は神の愛に成り立つ「啓示 Revelation の宗教」で、それに対して佛教は「自覚・目覚め Buddha の宗教」と言われます。

## 佛教音楽「真実との出遇い」

### Ⅱ 「外へ」から「内へ」の内実化

#### 一 一二〇世紀までの繁栄と二一世紀からの課題

ここで言う「外へ」というのは、二〇世紀までの人間の幸福を求めて科学技術を開発してきた姿勢のことを指します。「外へ」という状況で与えられた繁栄、科学技術の発展が、私どもにとって二一世紀にはどうなるか。そういう意味で「二一世紀からの課題」としました。これはすべて科学技術と人間の精神、心の問題をどう考えていくかに関わっています。

十七世紀初期頃地動説を唱えたガリレオ・ガリレイ（Galileo Galilei）は、近代科学の父と言われていますが、実はその一世紀ほど前にコペルニクス（Nicolaus Copernicus）が地動説を唱えています。しかしコペルニクスの地動説は数学的に証明できたものではなく、幾何学上の地動説でした。根拠がどうであれ、地動説を唱えることは当時の人たちにとって、キリスト教界や法王庁に反旗をひるがえすことでしたの

で、厳しく糾弾されました。キリスト教の「神 God」は万物の創造主です。宇宙も地球も人間も含めて、すべてが「神の創造物」で、神が中心の世界観・宇宙観でした。そういう中で「太陽を中心にした宇宙がある」ということは、当時の神学の世界では受け入れられないことでした。コペルニクスは非難され、糾弾されましたが、その後ガリレイが数学的に計算してそれを証明しました。しかし彼も宗教裁判にかけられ、神への冒瀆罪で糾弾されました。亡くなってからも墓も許可されなかったようです。ガリレイは宗教裁判の場ではやむなく天動説を認めたようですが、有名な言葉「しかし地球は動いている」と呟いていたそうです。

このプロセスを経て次のデカルトの時代になります。余談ですが、大正・昭和初期の頃「カント、デカルト、ショウペンハウエル」の三人の頭文字を取った「デカンシヨ節」が学生の間に流行した時代がありました。当時の学生たちのバンカラ調や学生気質が偲ばれる流行歌でした。

デカルトの言葉に「我思う、故に我在り（*cogito, ergo sum*）」というのがあります。私は考えている。だから現在の私がある。その逆は、思考を止めれば自分という存在

# 佛教音楽「真実との出遇い」

は有りえないということですね。「近代哲学の父」と言われた彼の影響は、後の世の中を大きく変えていきました。

次にカントが出てきます。コペルニクスが天動説を地動説に変えたように、カントの影響も大きいものでした。一つの主張を大きく変化させる、生命の危険を負ってまでも変える、そういう発想の転換をカントも同じようにしています。彼は「世界の永遠平和は、人々の交流と軍備全廃が大切である」と述べました。当時の軍備には今のような核兵器はありませんが、それを思いますと、カントの先見性を感じます。即ち人間同士の争いの行き着く戦争の問題は、軍備の全廃しかないのだということです。

ところで近代文明・科学の基本は数学であるということが言われています。カントの後、一八世紀後半から十九世紀中頃活躍した、ガウス (K.F. Gauss) という数学者がいました。彼は「数学の王」とも言われ、有名な言葉「Mathematics, the Queen of Science. (数学は科学の女王である)」を残しています。数学が科学文明の基本であるということですね。その基本に支えられた科学技術が、その後とくに二〇世紀、急激な発展を遂げ、多大な変化を与えて来ました。しかし現今の諸問題点がそこから



出ていますね。

一八六六年、スウェーデンの科学者ノーベル（A. B. Nobel）がダイナマイトを発明しましたが、これはもともと工業用に作られた火薬でした。それが第一次世界大戦では、強力な武器として使われ、その後第二次世界大戦には、合計五百万トンに及ぶTNT爆弾の使用になり、更に日本には原子爆弾が投下され、人類史上かつてない大惨害に拡大したのです。一発の原爆で広島や長崎の二・三〇万人の方が亡くなりました。この大戦では、およそ六千万人もの死傷者が記録されています。そのような多くの尊い生命の犠牲を経て、一九四五年八月一日があるのです。

その結果、米英ソなどの連合戦勝国主導型による東京裁判が開かれたのです。

「日本人は今回の戦争で世界平和を脅かした。今後の人類はこのような卑劣な非人道的な行動をとってはならない」ということを大前提にして、日本を断罪したのです。

ところが一九四五年以降、科学技術の進展が武器の開発に繋がり、その中心がアメリカであり、ソヴィエットであり、原爆よりも更に破壊力の高い水素爆弾、中性子爆弾の開発に競い合ったのはご存じの通りでしょう。両国ともに「核兵器の開発が戦争

## 佛教音楽「真実との出遇い」

再発の抑止力」になるという理由でした。自国さえ安全ならば、他国はどうでもいいという価値観が、この競争原理を促進させたのでしょうか。

その後の原子力関係施設で発生した予測外の事故を含め、悲惨な人道的行動や誤りは、繰り返されてはなりません。カントのいう軍備全廃や二〇世紀の産物である核兵器廃絶は、一人ひとりの力ではどうにもなりません。しかし、先ずは隣同士、そしてグループ同士、地域内同士等の共通認識が必要ではないでしょうか。その認識が広がるだけでも核兵器縮小に繋がるのではないのでしょうか。そして何時の日にか核兵器開発阻止に直結するのではないのでしょうか。

二一世紀が、科学技術への過信と誤用に覚醒する世紀であって欲しいと願うばかりです。機械技術を誤らずに正しく使える知識や知恵を身につければ、メル友で自分の生命を失うようなことが無くなるのではないのでしょうか。私はそう思います。

### 二 佛教つてななに？

「い」で「佛陀 Buddha」という言葉を再認識する必要があります。√Budh、とい

う動詞には「目が覚める。気がつく」という意味があります。眠っていたのが「徐々に目が覚める」場合も「ハッと目が覚める」場合もありましょう。語尾 “-ed” は英語の過去分詞形 “-ed” と同じで、過去受動分詞の語尾形です。「目覚めたもの、目覚めた人」が “Buddha” です。何に目覚めたか。真実・真理に目覚めた人、真理を悟った人が「佛陀 Buddha」です。固有名詞ではありません。ゴータマ・シッダータという普通の人間が真理に目覚めて、ゴータマ・ブッダになられたということです。皆さんにもそれぞれ「佛陀 Buddha」になる可能性が内在している、内在する生命（いのち）を持つているのです。与えられて気がつくことではなく、アウェイク awake する。目覚めていく。自分が気がついていく。それが佛教の基本です。例えば「五条通りを皆と渡れば恐くない」というものではありません。「皆で」ではなく、「自分で、自分が目覚めるかどうか」が重要です。決してエゴイズムではありません。自分だけ目覚めればよいのもありません。佛の別名「如来 [athagata]」という言葉にも大きな意味があります。自分が目覚めることにより、他の人にも分かって戴ける世界が、佛教の世界です。自分だけでいいというのは、佛教の世界ではありません。

佛教音楽「真実との出遇い」

皆さんの中で、殆どの方が「自分って何なんだろう。人間って何だろう。私ってなんで生まれてきたのだろう」と自問された経験をお持ちでしょう。私もそうでした。釈尊は、「生・老・病・死」という四苦を解決しようとして出家されました。二九歳の時です。それから六年間、骨皮ばかりにやせ細るほどの苦行をされています。その詳細は皆さんの『聖典』の中に書いてあります。苦行を離れた後、ピッパラ樹の下で思索を重ねられ、深い眠りから覚めたように遂に悟られた、真実に気がつかれたのです。その事実の内容が、レジユメにも書いた「縁起、無常、無明」等であったと経典に記録されています。学長先生の講演レジユメにあった四法印もこの部分に入ります。それに気がつかれて、ゴータマ・シッタールタがゴータマ・ブッダになられたのです。

まず、「縁起 (pratyasaṃutpada)」は、すべての事象は、種々な要素が集まって生じているものということです。サンスクリット、パリー語の原語を書いておきました。詳細に分析しますと、接頭辞 *prati-* (に向かって) + 動詞 *√i-* (行く) + *sam-* (一緒) + *ut-* (上) + *pad* (生じる) となります。

「縁起」の内容には、良いことも、悪いことも、苦しいことも、楽しいことも喜怒哀楽すべてが含まれていて、すべてその状況は「縁によって起こるもの」である。縁は人から与えられるだけでなく、自分がやった行為も含められます。

次に、「無常 (anitya)」は、接頭辞  $\text{a-}$  (否定) +  $\text{nitya}$  (常に) で、世の中には常なるものはなく、「諸行 (全ての作られたもの) は無常」。「無明 (avidya)」は  $\text{a-}$  +  $\text{vid}$  (知る) という言葉で、「ものごとを知れば視野が広がり、明るくなる」の否定語です。「明」には、照明の明るさもありますが、いまは精神的な知的な明るさのこです。「知識」と「智慧」もありますが、知識は分析したもの、詰め込んだもの、智慧はその人が積み重ねて来た知識が血となり、肉となり深まってきたものといえましょう。「叡智」でもあります。知識の世界は科学の世界です。智慧の世界はブッダの世界、精神的な世界、心の世界と言えましょう。そのような明るい世界に無明であること。人間はどれだけ優れていても、真実に気がつかなければ知らないことと同じであるということでしょう。

そして「真実 (satya)」とは、動詞  $\text{as}$  (be 動詞) + 接尾辞  $\text{-ya}$  (分詞) で、

佛教音楽「真実との出遇い」

“satya (あるべきもの、あらねばならないもの)”です。オウム真理教がサティアンと言いましたが、佛教用語の悪用です。“satya”の世界には、サリンを撒くとか、人を殺傷するような要素は一切ありません。それを否定し超えることが釈尊の教えであり、佛教の本質です。

### III 佛教音楽 そのひびき

これから用意して参りましたテープで、佛教音楽を数曲お聴きいただきたいと思ひます。まず初めに、「ほとけさま」という昭和七年（一九三二）の作品で、ボニー・ジャックスと東京の下町荒川にある少年少女たちの合唱隊の演奏です。

ほとけさま 山田 静 作詞 小松 耕輔 作曲

一のんののさま 佛<sup>ほとけ</sup>さま わたしの好<sup>す</sup>きな 母<sup>かあ</sup>さまの

お胸むねのように やんわりと 抱だかれてみたい 佛さま

二 のんの ののさま 佛さま わたしの好きな 父ちちさまの

お手て々のように しつかりと すがつてみたい 佛さま

三 のんの ののさま 佛さま みあかしあげて おがむとき

お姿すがた見えて きらきらと 後光こうこうのひかる 佛さま

この曲は、日本の軍国主義が高まりだした時代の作品ですが、文部省で作られた作品です。昭和四年、文部省の中に佛教音楽協会ができました。毎年、歌詞を公募し、作曲を依頼して作品を発表しました。ここにお見せしている楽譜には、「佛教聖歌第一回発表曲」と書いてあります。懸賞当選曲は、「花祭の歌」と「朝の歌」で、今でも歌われている曲であります。第二回目の昭和五年のこの楽譜は、文部省佛教音楽協会刊行で一一曲あり、「佛教青年会の歌」等が発表されております。その後、昭和一五年まで続けられ、総数一七三曲に及ぶ作品が発表されました。その後、第二次世界大戦勃発という時代の流れのためにストップしてしまいました。

佛教音楽「真実との出遇い」

昭和二〇年八月一日、過酷な戦争が終結、日本の社会は初めての敗戦で、これまでの国家体制が根底からくつがえされ、絶望的な混乱の極みにありました。昭和二二年、東本願寺のご門主ご夫妻（智子お裏方は光華女子学園の名譽総裁でした）は、戦後の混乱した社会状況を何とか音楽で復興したいと願われ、大谷樂苑を創設されました。昭和二二・三年にかけて作詞を公募し、しかるべき方々に作曲を依頼され、翌年その成果一〇曲を公表されました。

その中から第七番目の作品「ほとけさまは」を聴いて戴きましよう。この作品は一般家庭の家族関係を歌いあげたものです。昔の日本の家族構成は核家族ではなく、おじいさん、おばあさんも一緒に生活で、そういう家庭の状況を歌った作品です。

ほとけさまは

森山 美苗 作詞

弘田 龍太郎 作曲（大谷樂苑選定）

一 ほとけさまは どこにいらっしやる

春は 花咲く 枝のもと ララ



二

夏は 水辺の 草のかげ ララ

秋は 空ゆく 雲の上 ララ

冬は 窓うつ 雪の中 ララララ

いつもどこかで 見ていてくださる

いつも何かを 教えてくださる

ほとけさまは あれあれ あそこに いらっしやる

ほとけさまは どこにいらっしやる

お眉 ま白な おじいさま ララ

お目々やさしい おばあさま ララ

お胸 豊かな お父さま ララ

お手々清らかな お母さま ララララ

昼でも夜でも 守つてくださる

いつもあなたを 支えてくださる

ほとけさまは あなたの おそばに いらっしやる

佛教音楽「真実との出遇い」

次に大谷楽苑が作った讃仰歌作品三〇数曲のうち、五番目の「人の世の」という作品です。大津市合唱フェスティバルに参加し、佛教讃歌を紹介するために合唱仲間に集まっていたいただいた私どもの最近の演奏録音です。

人の世の 八谷 秋剣 作詞 服部 正作曲（大谷楽苑選定）

一 人の世の 朝ぼらけ

心澄み 思いはるけし

青烟に 歙ふるい

口誦む み法の歌を

二 人の世の 真昼どき

身も淨く 力あふるる

海原に 漁りつ

法の声 浪に聞かん

三 人の世の 黄昏や

み教えの まにまに汗し

家路さす 西の空

輝けり み法の光

四 人の世の 静けき夜

飲びは 法の灯

鐘ならし み名よべば

現世は いま浄土

すでに皆さんがお気づきのように、私は声楽のおちこぼれなんです、幸いなことにアンサンブルに参加できる場所があります。ピアニストか指揮者しかありませんので人の前で目立つのですが、振るという形でアンサンブルに参加しています。四番までありますが、演奏時間の都合で一番と四番の抜粋演奏でした。

次は、現代の作品の中から一曲、一九九八年の蓮如上人五百回忌法要の記念に作ら

佛教音楽「真実との出遇い」

れた作品をお聴きいただきます。これも私どもの演奏です。

バラバラでいっしょ      和田 廣樹 & 智子 作詞      指方 浩 作曲

一      丸 まる 三角 さんかく 四角 しかく      丸 三角 四角

顔 かお も 形 かたち も 違 ちが う け ど      だ から      と っ て も      お も し ろ い  
大 おお き な 願 ねが い に      つ つ ま れ て

バラバラでいっしょ      バラバラでいっしょ

誰 だれ も が      今 いま を      生 い き て い る

二      丸 まる 三角 さんかく 四角 しかく      丸 三角 四角

声 こゑ も 言 ことば 葉 は も 違 ちが う け ど      だ から と っ て も      楽 たの し い ね  
一 つ の 願 ねが い に      支 ささ え ら れ

バラバラでいっしょ      バラバラでいっしょ

誰 だれ も が      今 いま を      生 い き て い る

三 丸 三角 四角 丸 三角 四角

夢も心も 違うけど だから とつても 素晴らしい

深い願いに 生かされて

バラバラでいっしょ バラバラでいっしょ

誰もが 今を 生きている

いまこの曲で意外に感じましたのは、前奏が始まった途端、皆さんの雰囲気が変わりました。明るくなった感じがしました。若い人々が佛教に抱くイメージは、お葬式とかお年寄りが集まる抹香臭い場所という印象が多いようです。しかし今の皆さんの表情は、明るくて「私たちの感覚だわ」という感じでした。それを感じた私も小さく手を振って指揮していました。聴いて下さる方々を前にして振るという行為は初めてのことでもあります。

次にまた『讃仰歌』からその第一番目「みほとけは」です。私の出身の寺では、お葬式の時に、また何かの会合の時には歌っております。皆さんの『聖典』の中にも

佛教音楽「真実との出遇い」

採用されています。

みほとけは 仲野 良一 作詞 信時 潔 作曲（大谷楽苑選定）

- |   |         |         |         |
|---|---------|---------|---------|
| 一 | みほとけは   | まなことじて  | み名よべば   |
|   | さやかにいます | わがまえに   | さやかにいます |
| 二 | みほとけは   | ひとりなげきて | み名よべば   |
|   | 笑みてぞいます | わが胸に    | 笑みてぞいます |
| 三 | みほとけは   | 慕いまつりて  | み名よべば   |
|   | 包みています  | わがいのち   | 包みています  |

「さやかにいます わがまえに」亡くなった方が自分を見つめて下さっている。包んで下さっている。亡くなった方は自分にとって佛様なのです。いろんなことを教えてくれた佛様です。皆さんの中で、将来、結婚してお子さんができて、お子さんと早

く別れることもあるでしょう。死別することもあるでしょう。しかしたとえ幼い我が子であっても自分にとっては佛様なのです。そういう関係が佛教のものの見方です。

この作曲者信時潔先生は、先ほど皆さんが歌われた『光華女子学園の歌』の作曲者でもあります。クリスチャンの方ですが、第二次世界大戦の最中によく歌われました追悼の歌「海ゆかば」を作曲された方です。すばらしいレクイエム（鎮魂歌）ですが、第二次世界大戦後、戦争に関わった作品ということで軍歌と評価されてしまいました。戦後、先生は筆を折っておられました。

信時先生は山田耕作先生と同じ世代の方です。そういう方が筆を折られた。自分の責任ではないのですが、「海ゆかば」にひかれ出征して逝った若い人たちが多かったということをご自分の責任として受け止められたのです。皆さんの世代の人が戦争に行って、亡くなって帰ってくる。それをお迎える歌が「海ゆかば」でした。中身の濃いすばらしいレクイエムだと思います。それをあえて筆を折られた。作曲家が作曲活動が出来ないということは、身を切られるほどの辛さだったことでしょう。

その中で、「みとほけは」というこの作品を書かれました。高史明という在日韓国

## 佛教音楽「真実との出遇い」

人の作家がおられますが、この方が信時先生が「みほとけは」をお書きになった理由をいみじくも「きつとその方は佛様に会われたんでしょね」とおっしゃってくださいました。私はその言葉を聞いた時、そういうことがあったのだな、確かなんだなと思いました。

### Ⅳ むすび 佛教音楽 その目的

#### 一 教言引用

真実についての言葉を何点か挙げました。初めにベートーヴェンの言葉ですが、

「Von Herzen-möge es wieder-zu Herzen gehen」。

（心から そして再び 心へと伝わらんことを。）

彼の晩年の名作『莊嚴ミサ』の「キリエ」の冒頭に書きなぐってある言葉です。完全に耳が聞こえなくなつてからの言葉ですが、この表現に、彼の切実な願いが込められていると思います。



「神の御心により、私はこの作品を書かしめられた。願わくは、作品の心が演奏者の心へ、そして更には聴いて下さる方々の心にまで伝わって欲しい」という心からの願いであります。

芸術作品の背景には、大きな力「神の御心」があり、それが作詞者や作曲者を通して作品となる。その心が、更には演奏者を通して聴衆の心にまで響き伝わってほしいという願いでしょう。

「本当のものがわからないと、本当でないものを本当にする」（安田理深）

サリンの例がそうですね。殺してみたかったという一七歳の子の場合もそうでしょう。その子自身が、本当のことに気がついていれば、あのような突発的な殺人行為をとらずにすんだはずです。気がつかなかったために、わからなかったためにあのような行動をとってしまったと思います。

「自分の眼を明るくするのが勉強だが、眼をふさがれたり曇らされたりする勉強

佛教音楽「真実との出会い」

をしてゐて、勉強をしてゐると思つてゐる事はないだらうか」（中川一政）  
私自身もそうですがお互いに反省してみましよう。

「自分の番——いのちのバトン——」（相田みつを）

父と母で二人　父と母の両親で四人　そのまた両親で八人

こうして数えてゆくと　十代前で一、〇二四人

二十代前では……？　なんと百万人を超すんです

過去無量の　いのちのバトンを受けついで　自分の番をいきている

それがあなたのいのちです　それがわたしのいのちです

現在、ここにいる私共はある日から突然この世に生まれて来たのではなく、このよ  
うな過去無量の願いを受け継いで、ここにいるのですね。その願いのバトンを受け継  
いで今、走っている。その生命の込められた大切なバトンを、次の世代に渡すという  
責任があるということです。

「美しき色あれど香のなき花のごと　いのちなき言の葉いとさみしかり」（某師）

打算的な美辞麗句が、どれだけ無益であるか。言葉が多いことが必ずしも真実そのものを表現しきれるとはかぎらない。言葉が少なくても、全く音声がなくとも、「ひびき」の真実はあります。音声障害、言語障害、発語障害があっても、その人の「懸命な思い」は伝わるものです。そのような「心のひびき」を伝え合うこと、それが佛教音楽の使命です。キリスト教音楽でも同じでしょう。「ひびきを伝えること」それが音楽です。その「真実からのひびき」は、充分に受けとめられ、伝え合えるひびきとして充実したものでありたいものですね。

## 二 ま と め

最後に、本日の講題「真実との出遇い」への願いをまとめてみたいと思います。四六億年という地球の「悠久な流れ」の中で、人類の歴史は三百万年だそうです。それからみれば、「七・八〇年」という私たちの平均寿命は「一瞬間」でしょうね。しかし、今ここにしかない「私の生命<sup>いのち</sup>」は、悠久な生命<sup>いのち</sup>の流れから「私に注がれている願いそのもの」ではないでしょうか。その中身を尋ね、充実させるために、現在

# 佛教音楽「真実との出遇い」

の私たちが生きているのもありましょう。

その「一瞬間」を実感していただくために、佛教の「時間観」を原語も添えて書いておきました。因みに佛教では「一瞬間」を「一刹那 kṣaṇa」と表現しています。

過去…atta (ati+ta)…已に過ぎ去った時間。

現在…pratyupanna (prati+ut+pad+na)…今 生じている時間（一刹那 kṣaṇa）。

未来…anagata (an+a+gam+ta)…未だ来ていない時間。

「一期一会」という言葉も、この「一瞬間（＝刹那）」の理解のもとに実感される世界「時間観」でありましょう。

「一期一会」の実感は、お互いに心から理解し合えた時に、自然と湧きあがってくる感覚でありましょう。私にとっても「心にしみ伝わるひびき」が、自然に実感し合えた時、即ち「佛教音楽」への歩みの中で「言葉を越えたひびき」に包まれた時、「真実（生命ある本<sup>いのち</sup>当のもの）との出遇い」の第一歩が始まると感じております。

最後にもう一曲聴いていただいて本日の終りにしたいと思います。『讃仰歌』第三  
番目の「みめぐみの」という作品です。

みめぐみの 河合 恒人 作詞 古関 裕而 作曲（大谷樂苑選定）

一 みめぐみの ひかりにぬれて

蓮池に 花は ま白く

みほとけの 生命いのちかおりて 現世うつしよに

美うつくしき 美うつくしき 花はひらきぬ

二 まろき虹にじ 空そらにかかれる

七色なないろの橋はしを わたりて

みほとけの み手にいだかれ 遙はるかなる

美しき 美しき 国くにをめぐらん

三 わがこころ うれいなき華はな

佛教音楽「真実との出遇い」

永久とこねほの母ははを

したいて

みほとけの

み名なとなえつつ もろともに

美しき 美しき

道みちをあゆまん

佛様の智慧を「光」に喩えて表現しますが、「みめぐみの 光にぬれて」の光であり、『正信偈』の冒頭「歸命無量壽如来 南無不可思議光」の光ですね。

光華女子学園の「光」も佛様の智慧のことでしょう。「華」は結実したもの、美しいもの、完成したもの。佛様の智慧を完成しようと努めていく場所、歩んでいく場所、それが光華女子学園ではないでしょうか。この曲を聴きながらフトこのようなことを感じさせていただきました。今回も新たな願いに促されて、お話をさせていただきました。長時間ご清聴下さり有り難うございました。

——二〇〇一年五月二三日——